あやかし退魔録

ブッチャー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あやかし退魔録

【Ｎコード】
Ｎ６３９６Ｔ

【作者名】
ブッチャー

【あらすじ】
いつも白けた雰囲気の主人公、八坂　宗一郎。学校では殆ど人と話さず、何かの行事にも参加しない為、常に浮いた存在だった。だが宗一は気にもせず、ある目的の為に日々を過ごしていた
そんな折、一人の教師が学校へやって来る。その教師は宗一の隠された力を見破り、力を貸してほしいと言う。にべもなく断る宗一だが、その時既に異変は始まっていた

短編です

一、火車　前編

子供ん頃からおかしなもんが見えた。昔、親父だったクソ野郎のせいだ。最初の頃は、一々ムカついていたが、今ではだからなに？っつー感じ。基本スルーしている

だが、面倒な事もある。例えば今だ

「やってくれるかしら？」

「やだね」

学校の保健室で放課後、若い女の教師と二人きりで居る。安いＡＶみてーな設定だが、そんな話ではない

「クラスメートを助けようとは思わないの？」

「あんたこそ、自分の生徒だろ」

窓の外から見える、赤い斑雲からベッドに腰を下ろしている水上へ視線を移し、うんざりした口調で言い返す。だが、水上は更にうんざりとした顔をしていた

「面倒な事はしたくないの」

「俺もだ」

面倒な事。色々あるが、クラスメートが妖魔に取り付かれて、死にそうになっている。これほど面倒な事も少ないだろう

制服の胸元からタバコとライターを取り出す

「私の前で吸わないでくれない？」

水上が担任で、俺が生徒だからと言う理由ではなく、ただタバコの煙が嫌いだからそう言っているのだろう。俺は気にせずタバコに火をつける

「……とにかく、この件で私達は動かない。貴方が何もしないのなら、彼女が三日後、焼死体となって見つかるだけよ」

「へぇ。そりゃ騒ぎになりそうだ」

喉に絡み付く、まずい紫煙を肺に入れ、フゥっと吐き出す。俺との距離はあると言うのに、水上は嫌な顔をして手で扇いだ

「学校はつまらないからな。少しは退屈しのぎになるんじゃねーの」

「そんなにつまらないなら、学校なんて来なければ良いんじゃない？　むしろ来ないで欲しい」

「あんたが決める事じゃないだろ。馬鹿か？」

水上が俺を強く睨む。教師の中で、最も美人と言われる女の睨みは、なるほど確かに石にされそうな程、冷たく、鋭い

「……話は終わったわ。早く出て行きなさい」

「ああ」

窓の淵にタバコを押し付け、火を消す。そして俺用の灰皿と化した空の薬瓶に吸い殻を捨て、そのまま保健室を出た

誰も居ない学校は異空間だ。日常から掛け離れている為、魑魅魍魎を呼び易い。自分の足音しか聞こえない廊下を歩き、先程した会話を推考する

水上　朱美。去年、臨時教諭としてこの学校に入り込んだ女だが、正体は妖を管理する機関、六葉に属する者らしい

水上は来た初日に俺の力を見破り、協力を要請してきた。その内容は、昨年突如この学校に現れ、もうじき開くと言われる鬼門。それを防ぐ手伝いをしてくれ、と言うものだ

鬼門は、幻と現が交わる地獄道。それが開けば妖魔が溢れ出し、人を喰らう。しかし鬼門は開く直前まで手出しが出来ない道でもある。六葉は水上に鬼門の監視を任せ、それが開く兆しを見せた時、六葉一派を呼ぶ役目を持つとの事

だが、開いてないとは言え、鬼門は鬼門。そこにあるだけで人体に影響を与え、稀にだが門が開く前に妖魔が出てくる事もある。で、だ

「……面倒くせ」

日が落ち、町は闇に包まれた。闇を照らす人工の光は闇を払う力は無く、むしろ蛾の様に、まがい物と知りながらもそれを求める深き者達を集め呼ぶ

「熱いよ……ねぇ早く、早くしよう？」

昨日、親戚の喪中で学校を欠席し、火葬場で妖魔に取り憑かれたのは、陸上部の鏡　優花って女。今日は普通に出席していたが、途中で熱を出し、早退していた

その鏡の机から妖魔の気配を追い、ようやく今、河川敷にある橋の下で、鏡の姿を見付ける事が出来た。電灯が近くにあるので辛うじて姿が見えるが、どうも鏡の他に二人居るようだ

「好きだね～あんた。ホテル代出すってのにさ」

「ケツとかいける？　一回、やってみたいんだけど」

「いいよ、なんでもいいよ。早くして、早く欲しいの」

大分、精神汚染が進んでいるな

「オッケー。んじゃ、楽しも～」

「止めておけ。それをやったらもう、人には戻れなくなるぞ」

河川敷を降り、三人に近付きながら声をかける

「あ？　……何、お前」

鏡を抱き、キスをしようとしていた男が眼を剥いて俺を睨みつけた。もう一人もまた、身体をユラユラと揺らして威嚇している

「お前らには話していない。つか邪魔。消えろ」

「はぁ？　邪魔なのはそっちだって。なんなのマジで」
「……なんか超醒めた。外とか趣味じゃねーし。ほっといて別んとこ行こうぜ、篤志」
ユラユラうざったいが、こっちの方はまだ話しが通じそうだな
「行くなら女をおいて行けよ」
「……は？　何？　もしか喧嘩売ってん？」
「良いから消えろって。つか騒ぐなよ雑魚が」
「ああ！？」
「こいつ……やんぞ、光永」
鏡を抱いていた男は鏡を離し、俺に向かって来る
「やるのか？　お互い損するぞ」
人がせっかく忠告してやってんのに。つかいつもこうなるな……
「うたってんじゃねぇぞテメェ……」
「良いから、早く来いって。暇じゃないんだよ、俺は」
「じゃ、死ねよ」

篤志ったか？　篤志はジーンズのポケットから懐かしのバタフライナイフを取り出し、普通に俺の方へ歩いて来て、そのまま俺の腹を刺した

「いきなりナイフか。頭悪いだろお前」

「……え？」

「んなもんで人刺したって得な事ないだろ。万が一それで相手が死んだりしたら最悪だ」

一生、重荷になる

「は、はぁ？　な、なんで刺さんねーの？」

篤志は何度も俺の身体にナイフを突き刺す

「金の咀、金剛体身。言っても分からないだろ？」

「は？　ぶげ！？」

左で、篤志の顎にフックを入れる。特に力は入れていないが、金剛を解かないままで殴ったので、ハンマーで殴られたような感覚があるだろう

「ぎっ……ひ、ぇぇぇひぇ、ひいぃぃぃぃ！！」

顎を押さえ、篤志は地面を転げ回った。砕けただけで大袈裟だな

「あ、篤志！？」

「悪いが、もう逃がせない。騒がれたら面倒だからな」
残った一人にゆっくりと語り、次に一気に踏み込んで間合いを詰める。棒立ちしていた光永は、僅かに防御の反応を見せたが、それより先に俺の右腕が手首の辺りまで鳩尾にめり込んだ
「うっ、ぐっ」
光永は腹を押さえ、息が詰まったように喘ぎ
「う、うげぇええ！」
今日の夕食を、呼吸と共に吐き出す
「後で救急車呼んでやるから」
「あ……あげ……い」
「ひ、ぃ、いぁあ」
うるせーな
「二人とも少し寝てろ」
前のめりに倒れ、吐瀉物の中で喚いている光永の髪を掴み上げ、額に指で眠りの呪を刻む。痛みと恐怖で涙を流す光永の瞼がスーっと閉じられ、直ぐに寝息をかき始めた
「次はお前」

そう声をかけると、篤志は呻きながら立ち上がり逃げ出した。しかし、土手で滑り転んでしまう

「そんな怯えるなよ。捕って喰う訳じゃないんだしよ」

つか命助けてやってんのに、手間掛けさせんなって

呆れながら篤志を捕まえて同じ処置をする

「ひっ！　ひ……」

「お休み。……さて、やっと本命か」

振り返って、しゃがみ込む鏡の所へ歩く。鏡は自分の恥部や胸を激しくさすり、吐息を漏らす

「熱い、熱いよぉぉお」

「……何が三日だ」

明日には焼け死ぬぞ、これ

「ねぇ、ねぇ……欲しいの、欲しいのぉお」

生気の無い顔で俺を見上げ、鏡は呟く。だが眼だけは爛々と燃えていた

「ああ、今やるよ」

鏡の顎を上げ、その濡れた唇にキスをする。ねっとりと吸い付く感触と、焼けるような快楽が脳を蕩かす

「……」

そして俺の中に舌が入った瞬間、鏡の背後が陽炎の様に揺らぐ。……出たか

「邪魔だ」

鏡を左腕で退かし、右手で懐から札を取り出す

「オン・マユラ・キランデイ・ソワカ」

ゆらぎに札を使い、そのまま橋の壁に張り付け、真言を刻む。束縛の印

《グ？　グウウウウウウウウ》

鏡は糸が切れた人形の様に崩れ落ちたが、印に縫い付けられたゆらぎは、そのまま壁に縛られている。そして次第にその姿を現していった

それは血のように赤い火で出来ていた

「……火車」

《あんぎゃああ！！》

死者の亡きがらを集め、焼いて喰らう妖魔。その正体は、火を使う

動物霊が主と言われているが、この姿は

「狐？」

人間の身体ほどある二尾の赤き狐。するとこの炎は狐火か

「ん……うんん」

倒れたままの鏡が、苦しそうに呻く。狐もまた、同調するかの様にもがいた

「……まだ大丈夫か」

鏡を抱き上げ河川敷の上に行き、そこにあるベンチに寝かせる。野郎共は面倒くせぇから放置だ

そして直ぐさま橋の下に戻ると、狐はその束縛を半分以上解除していた。結構強い札なんだがな

「やっぱ、そのまま調伏されてはくれないか」

火車には確か雲洞庵の呪が効いた筈だが……

「……覚えてねぇし」

だが、此処は水が豊富にある。今のうちにさっさと終わらしてやるよ

「水の咀、水燕刃」

川に高さ三メートル程の水柱が八本立ち、それは百羽の鳥になって

狐を襲う

《ぎぁぎぁぎぁあああああ！！》

切り裂く翼は、炎で出来た狐の身体を削るが、消すまでは到らない

「……マジか」

思ったより強い？

《あああああ！！》

バチン。極限まで張り詰めた弦が切れた時に近い音がなり、狐は束縛から解放される。そして、文字通り燃え上がった

後編

燃え上がった火車は枯れ草を灰にし、石をも溶かす業火となって、その周りを侵食する

「ちっ」

勢いが強すぎて、水燕が触れる前に蒸発してしまう。狐火は水では消えにくいと聞いていたが、此処まで使えねぇとは……

そうこうしている内にも炎は広がり、放置していた野郎どもの側まで迫っていた

「……くそ！」

結局、やるしかねぇのか

《キ……キ……キ。ァアアア》

「分かった、分かった！」

やりゃ良いんだろ、やりゃ！！

「ふぅぅぅ」

肺にある全ての息を吐き出し、思考を一瞬で白にする

そして潜る。己の中へ

「……」

色が無く、距離や重力、時間すら無い場所。その場所に一人立つのは俺。俺は俺を見下ろし、俺の身体に入る

それは空であり、溢れていた。俺はその一つに手を伸ばす

「……行くぜ」

俺の中に眠る、人であり人では無いもの

人と闇がなくては存在すら出来ぬ、か弱き化け物

かの者は鬼。俺の中に住まい、無限に広がる檻の中で俺の魂を永遠に喰らう悪鬼

「人が作りし幻想の赤子よ。人から生まれ、人を否定する化け物よ」

故に俺は、お前をこう呼ぶ

「きやれ、アヤカシよ」

今宵、手を繋ぐのは

「はいね、来ました烏天狗！　お久しぶりです主様～」

どっかのドブ川みてーにきたねー黒翼に、北国で降る牡丹雪に近い質感と白い肌を持った鳥人、烏天狗。俺はそいつを引っ張り、現世に呼び寄せる

「ふぃ〜。やっぱりシャバは良いですね〜」

鳥の癖に猫っぽいガキ面をニヤませ、着ている白装束の胸元をパタパタと扇ぐ。胸が見えているが超貧相過ぎて今だに性別が分からない

「……今、失礼な事、考えません？」

「さぁな。つかやるぞ、いい加減暑い」

「あ〜い。じゃ行きますよ！　風塵結界、ちりぬるおわか！！」

烏天狗は、くるりと一回宙返りをし、黒い翼を羽ばたかす。風は烏天狗を中心に四散し始めた

《オオ……オオオオ！》

風は周囲と、火車を守る全て狐火を巻き込み、炎を纏う風となる。その風は俺と、ただの狐となった火車を囲むように流れて外と遮断した

「行くぞ」

「あい！　風の槍、風葬三矢！！」

烏天狗の周りに風が集まり、濃縮し、透明の槍を作り出した。つっても見えねーけど

「突き刺され〜」

火車に向かって烏天狗が指を指す。しゅん。そんな音が鳴り、次に

火車が悲鳴を上げた

「とどめだ」

頭、胸、腹と、でかい風穴を開けた火車に走り寄り、結構高い札を取り出す

「ノウマク・サンマンダ・バサラダンカン」

《ギ……ギャアアアアアアアアア！！》

火車は断末魔を叫び、その力を失った

「調伏終了だ」

《ア……ァ》

「おっと」

身体と共に消滅しそうだった火車の魂を捕まえ、俺の魂に取り込む

山の主だった母親を人間に殺され、焼いて喰われる事も無く剥製にされた怨みか。……分かった。お前の母親は、いずれ俺が成仏させる。だから

「俺ん中で、ゆっくり休んでろ」

その怨みが消えるまで

「……。つー事だ、お前も戻れ」

「え～、主様冷たい～。一緒にファミレスでご飯行きましょうよ～」
「背中に羽根が生えてる奴といけるかよ。おら、戻れ。後で供物を捧げてやるから」
「……はぁい。主様のいけず……」
ぶつくさ文句を言いながら、烏天狗は俺の中に戻って行く
「ぐっ！　……」
まだ大丈夫そうだが、後2、3体が限度だな
「……ん……にゃ」
「……」
鏡の野郎、気持ち良さそうに寝返りなんかうっていやがる
「……はぁ」
めんどくせ

エピローグ

河川敷から荷物を背負って歩いて20分。ようやく荷物がモゾモゾしてきやがった

「う……ん？　え！？」

「……やっと起きたか」

荷物、鏡に声をかけると鏡はジタバタ暴れ出す

「え？　えぇ！？　な、なんで八坂君が私をおんぶ！？」

「暴れんな、落とすぞ」

「あ、う、うん、ごめんなさい」

「……道端でお前が倒れてたんだよ。迷惑な奴だな」

「え？　外で？　ど、どうして？」

「知らねぇよ。寝ぼけてたんだろ」

「そ、そうかな……。そうなのかな？」

淡い照明だけの暗い道は少しづつ賑やかになり、闇すらおぞましくて近寄る事を躊躇う、濃密でまばゆい色光に包まれた場所、すなわち駅前へと出た

「……もう駅前だ。此処なら大丈夫だろ？」

鏡を降ろし、背を向ける

「え？　う、うん……」

「俺は帰る。お前もまた寝ぼけない内に帰れ。次は起こさねーからな」

「う、うん……。あ、ありがと、八坂君……」

「おう」

たく、疲れたぜ

二、学校　前編

ねぇ、こっち来て
ほら、綺麗でしょう
触って
もっともっと触って
そしてちょうだい
あなたをちょうだい
わたしが寝るまで
あなたが枯れるまで

※

嫌いな物がある
一に親父
二に学校
三にうるせー奴

「八坂君！　今日こそは手伝ってもらうからね」

学校の放課後、帰ろうとした俺にクラス委員の富里が立ち塞がる。
睨んでみても、全く動じる様子が無い

「手伝わねぇよ」

そう言い富里の横を素通りする途中、腕を掴ま阻まれる

「なんだよ」

「もう来週なんだよ、星河祭。少しくらい手伝ってくれないと、八坂君も当日楽しめないでしょ？」

「出ねーから」

面倒臭い

「だ、駄目だよ！　せっかくのお祭りだよ？　楽しまなきゃ」

「もうほっとけよ琴音！　八坂なんかどうでも良いだろ！？」

後ろで作業をしていた島田が、突然そう怒鳴る。その声に富里がうろたえている内に俺は富里の手を外し、教室を出た

クラスの奴らは俺に殆ど干渉しない。一時文句を言い、喧嘩売って来た野郎もいたが、体育館裏でやんわりと説得したものだ

だがあいつ、富里だけは始めて会った時からやけに絡んで来る。一応俺を思っての事らしいが、うっとうしい。俺に声掛けたって得し

ねーだろうによ

「……で、何の用だ？」

下駄箱ん所で靴を履き替え、先程から俺の後を追っていた影に問う

「あら、バレてた？　気配を消していたのだけど」

「香水がきついんだよ、あんたは」

廊下の隅から姿を表す、白衣姿の妖艶な女。水上だ

「火車の件、助かったわありがとう」

「あんたに礼を言われる必要は無い。俺は目的を達しただけだ」

「それでも助かったわ。受け持つ生徒が焼死するなんて、目覚めが悪いもの」

ふわりと笑い、水上は振り返る

「火車、大切に育ててあげてね。その子、きっと成長するわ」

そう言い、俺の前から消えた

「……」

成長。妖魔は基本的には成長出来ない。それは成長する為の餌が捕れ無い為である

妖魔は主に人の魂を餌とするのだが、人は中々に厄介な生き物で、不自然な死や失踪にとても敏感なのだ

例えば隣の家に住んで居た人間が突然居なくなった。事件でも無い限り、世間では気にもしない出来事だが、近所に住む人間はそうはいかない。やはり数日間は話にはなるだろう

何故、突然居なくなったのか。そんなそぶりは無かったのに

そんな世間話じみた話の中に、時に答えが出る場合がある『そういえばあの夜、隣の家に赤い石が落ちていたような』

その一言で組織は動く

六葉、赤蛇、陰陽の祖。妖魔を調伏する者達

人の想像を超える強大な力を持つ妖魔でも、基本的に妖魔は群れない。群れない生き物は、最後には数に淘汰される

だから妖魔は大々的に人を狩る事はしない。ひっそりと隠れながら、少しずつ隙を見て人間を喰らうのだ

しかし今俺の中に飼っている妖魔、アヤカシ達は何のリスクも無く魂を喰らう事が出来る

特にこの狐は、魂を喰うスピードが尋常じゃなく速い。正直な所、かなりの厄介者だ

だが、もし本当に成長するのならば、俺は今度こそあいつを殺せるかも知れない

だからこれで構わない。この魂が最後の一欠けらになるまで喰らわせてやるよ、アヤカシ共

後編

五行。即ち木火土金水の属性だ

俺の中には三体の化け物が住む。火の火車、木の烏天狗、そして土

後、俺に必要なのは水と金なのだが、金はともかく水の妖魔は近頃、殆ど見かけなくなっている

水は命の象徴。汚れなき水と生命の流れ。季節は冬を表す

早い話、奴らは汚れた水がある場所に生息出来ないのだ

昔ならいざ知らず、現代の今、純粋に綺麗な水は少ない。だから水の妖魔が居る場所はアホでも推測出来てしまう。そしてそれを狩る者達がいた

最近では水の妖魔の数が余りにも減りすぎた事から、人を襲う者以外は狩る事を妖全般を管理しているグループ、翁の命に禁じられた。それはまるで天然記念物のように

もうまともな方法では、水の妖魔は手に入らない

まともな方法では、だけどな

※

六月の終わり、学校で倒れる女が増えた

まるで貧血の様に、突然ふらっと倒れる女達。そいつらの顔は一様に青白く、呼吸も乱れている

鬼門の影響が出始めたのかとも思ったが、そこまで影響するほど鬼門は開いていない。それに、仮に開き始めたとしたら水上らも黙ってはいないだろう

心に軽く留め、いつか現れるかも知れない水の妖魔を待つ。なんとも消極的な話だ

「……八坂」

「……ん？　なんだ」

全ての授業が終わり、放課後。今日も変化が無かった展開に苛立ちを感じていた俺に、珍しく島田が声を掛けてきた

「ちょっと……」

島田は廊下を指差す。来いって事か

「分かった」

声を掛けられた珍しさも相成って、素直に着いて行くと、廊下奥にある特別教室へ島田は入って行った

特別教室と言っても、基本はＤＶＤを見る為だけの部屋であり、普通の教室と変わらない。俺は手近な椅子に座り、島田は俺から少し離れた所に立った

「で、なんだ？」

「……お前、富里知らない？」

「は？」

言われている意味が分からなかった。富里はクラスメートだ、知らない訳が無い。だが、島田が聞いているのはそう言う事では無いだろう

「富里がどうした？」

尋ねると島田は憔悴した顔でそうかと頷き、机に腰を掛けた

「……」

そういえば、ここ二、三日の間、富里の顔を見ていない。あれだけ熱心に星河祭の準備をしていた奴が、急に学校を休むのも不自然ではある

「おい」

何か思案している島田に声を掛けると、島田は酷く怠そうに顔を上げた

「話、聞かせろ」

「あ？　……別にお前に聞かす話はねぇし」

「俺が聞くっつってんだよ。早く話せ」

「っ！　お前は！　お前はなんでいつもそうなんだよ！！」

島田は机を拳で叩き、座っている俺を目掛け、突っ込んで来た

「何キレてんだよ」

椅子の上に片膝を付き、片足の力だけで椅子から跳ぶ。そのまま島田の頭を利用し、跳び箱の様に島田を飛び越えた

「うわぁっ！？」

島田は椅子に勢い良く突っ込み、動かなくなる

「大丈夫か？」

死んだか？

「……だからムカつくんだよお前。完璧で、いつも俺らの事を見下してて」

生きてたか

「勝手に人の心情を語るなよ。俺はお前らを見下した事などない。雑魚だとは思うけどな」

「……見下してんじゃねーか」

島田は身体を起こし、俺を見上げて呆れ半分に呟く

「雑魚扱いは仕方ないだろ。俺はお前らより、数百倍は努力してるんだからよ。悔しいなら俺の百倍努力しろ」

「……やっぱ俺、お前嫌いだわ」

「そうかよ」

「……さっきの騒ぎで誰か来そうだ、別の所で全部話す。聞いてくれ」

「……」

面倒くせーな

※

「富里が居なくなったのは、月曜の夜なんだ」

学校を出て直ぐ近くにある公園。そこのベンチに座った俺に、島田は二本買ったジュースの一本を渡し、話し始める

「その日、俺と富里、最後まで星河祭の準備しててさ、んでその……暗くなってたから俺、富里を送って……」

「告白でもしたのか？」

「なんで知ってんだよ！　つか、話の先を読むなよ！？」

「良いからさっさとオチを話せ。くどいんだよ、てめぇは」
「ぐっ……もー分かってんと思うけど、断られたんだよ。好きな奴が居るからって！」
「そうか」
「ほんとにムカつくなお前！！」
「良いから早く言え。帰るぞ」
「ぐぐっ！　で！　俺も中々諦めきれねーで、ウダウダしてたら……」
「……なんだ？」
「あいつ、急に雰囲気変わって……なんか変で」
「急に変わった？　どういう風に」
「いや、なんつーか、なんかいきなり何話しても上の空って感じで……俺もムカついて、先に帰ったら……」
「次の日から学校に来なくなったか」
「……」
人の様子が変わる時、そこには何らかの理由がある。妖魔もその理由の一つだが、ま、たいていは関係ない

「話は分かった」

「え？　ま、待てよ！」

立ち上がり、帰ろうとする俺を島田は呼び止める

「なんだよそれ！　あいつ、本当に居なくなってんだぞ！？　なんか無いのかよ！」

「関係あるかよ。気になるならてめぇが探せ」

「探してるよ！　探してるけど見付からないんだよ！！　だから……だから警察にも行ったし、お前なんかにも聞いてるんだよ、馬鹿野郎！！」

島田は悲痛に近い声で叫んだ。それはアホみてーに強い想い

「……条件がある」

「ハァハァ、ハァ……あ？」

「星河祭、俺に準備しろとか二度とあの女に言わすなよ」

「はぁ？」

馬鹿声を出し、馬鹿づらをする馬鹿を置いて、俺は公園を出る

「ま、待てよ！」

「さっさと案内しろ。富里の様子が変わった場所へ」

三、絡新婦　前編

「ここだよ」

島田に案内されたのは、学校と駅前の中間点にある、しょぼくれた団地内にある小さな公園だった

夕方だと言うのに周囲には人の気配少なく、公園にも子供一人居ない

「……お前、こんな所で告白したのか？」

錆びたブランコが風に揺れ、ギコギコと不快な音を立てる。少しでも霊感ある奴ならこの公園に漂う嫌な気配に気付きそうなものだが

「わ、悪いかよ。人が少ないし良いと思ったんだよ」

「……まぁ良い。お前が絶望的に空気読めない奴だと言うのが分かった」

「な、なんだよ！」

「さて、と……。お前、富里の髪の毛とか持ってるか？」

「はぁ！？　も、持ってる訳ねーだろ！」

「あいつの私物は？」

「ねぇよ！」

「……使えねー」

「な、なんなんだよ！」

憤る島田を無視し、周囲を探る。もし妖魔が関わっているとしたら、数日間なら痕跡が残っている事が多い。匂いや色などの僅かな残存眼を凝らし、耳を澄ませ鼻を利かせる。そして肌で感じ、心で見る

「……」

浅く、広く。僅かな異端も見落さない

「……八坂？」

草、木、砂、人、石、土、風、花、虫、そして

「……糸？」

「は？」

「糸が……微かにだが見えた」

「はぁ？」

「……島田」

「な、なんだよ？」

「俺は帰る」

「え？　……っ！　お前！　ここまで案内させておいて何言ってんだよ！？」

「黙れ」

俺は殺意を込め、島田を睨む。島田は短い悲鳴を上げ、その後、ふざけるなと悪態を付きながら、俺の前から姿を消した

「……」

一人になった公園。見えた糸へ近寄り、指でそれに触れ、確信に至る

「絡新婦か？」

人を魅了し、精気を喰う蛛に近い性質を持つ妖魔

属性は土であり、その力は年齢によって変わる。この糸の粘りは恐らく百歳前後。蛛が成長する頃だ

「……めんどくせ」

ため息をつきながら、俺は学校へと戻った

※

術式、ヒトカタ

人間の形に似せた藁や紙などに血と肉を与え、擬似的な人間を作り

出す邪法

「つっ……」

中指に針を刺し、富里の机から取って来たノートで作ったヒトカタに血を垂らす。本来ならば富里の血や肉を使わなくてはならないのだが、仕方ない

続いて、富里のものだと思われる髪の毛を燃やし、その灰を血と混ぜ、その血でヒトカタに富里の真名を刻む

千尋

「お前の元へ案内しろ」

ヒトカタはゆらゆらと起き上がり、僅かに吹く風に乗って西方面へと流れた

「……」

どこに連れて行ってくれんだかな

※

ヒトカタは途中で急に止まり、うろつき、来た道を戻り、また戻ると言う奇妙な動きを何度も繰り返した。場所は分かっているのに行き方が分からない、そんな感じだ

そのうち日は落ち、夜の世界が訪れる。そこでようやくヒトカタは、

迷う事なくある場所へ俺を連れて行った

「学校……だと？」

学校は俺のテリトリーでもある。この場所に妖魔が居るとしたら、俺が気付かない筈がない

疑心暗鬼ながら、ヒトカタの後を追う。そしてヒトカタは体育館前で動きを止めた

「……」

俺は、体育館の扉に手を触れる

「っ！？」

指に感じる違和感。ねっとりと絡み付くようなこの感覚は……結界か！

この俺が気付かない程、見事に現世を遮断した結界

「……ち」

まずいな。このクラスの結界を構築する妖魔相手では、今手元にある装備じゃ太刀打ち出来ない可能性がある。一度引き上げるべきか

「……」

だが俺は既に結界に触れてしまった。これを作った奴もそれは気付かれているだろう、逃げられる恐れがある

「……星河祭くらいじゃ割が合わないな」
ため息をつき、結界を破るべく札を取り出す。だが、扉の結界はいつの間にか消えていた
「お誘いってか？　ふん」
扉を一気に開け放つ。開けた先は明かりこそ無いが、いつもと全く変わらない体育館内だった。だが、一つだけ違う所がある
「……よう」
その壇上に、制服を着た女の姿がある。それは圧倒的な存在感を放っている
「ふふ。こんばんは」
窓から入る星の光すら吸収してしまいそうな、漆黒の髪。その肌は白磁か、滑らかで繊細で作り物じみていた。しかし、それは血の通った肉であり、長く伸びた肢体に微かに浮かぶ肌の赤みが酷く蠱惑的に映る
人では無い。人ではこれほどまでに美しくはなれない。存在そのものが不自然なのだ
白い顔、黒い瞳、紅い唇。今、その唇で笑みを浮かべるこの女は、確かに化け物
「絡新婦！」

「雄にしては綺麗な子。でも残念ね、私、雄に興味が無いもの」
「奇遇だな、俺も年増に興味はねぇ」
「あら。うふふ」
「富里は何処に居る」
「焦らないで。もう少しお話しましょう？　あなたに興味があるの」
絡新婦は、音も無く壇上から飛び降りた。そして俺に近付いてくる
「ぐっ」
足が勝手に震える。その瞬間、悟った。これは完全なる捕食者を前にした本能による恐怖だと
まるで蜘蛛の巣に捕えられた羽虫のように、もうすぐ訪れるであろう死をただ待つ
こいつは、アレと同等レベルなのか……
「……そうかよ」
なら、丁度良いじゃねぇか。どのみちアレを殺す事が俺の目的だ、それの前哨戦だと思えば良い
俺は懐から札を抜き、構える

「てめぇはいらねぇ。浄化してやるよ、蛛ババア」

「可愛い子。良いわ、特別。あなたを」

食べてあげる

あなたが枯れるまで

私が眠るまで

中編

ある程度実戦経験を積めは、敵と対峙した時、力の差が分かる。そう、差で言うのならば、俺の前に立つこの女は遥か格上の化け物だった。

「ふっ！」

間合いを一気に詰め、右の掌打、左の足払い、そこから右の後ろ蹴りを放つ。しかし、そのどれもが奴の身体を掠りもしない。

「うふふ」

次に左右のステップ。フェイントを混ぜた回し蹴り。本命のソバット

「ちっ！」

客観的に分析する。俺の攻撃速度は０．００２秒、肉体を極限まで強化し、脳から肢体へ送られるシグナルすら省いた、無我神速の攻撃だ。人では反応すら出来ないし、ぶっちゃけ俺も何を打っているか分からん。しかし

「早いわね。素敵よ」

絡新婦は難無くいなす。

「オン・バサ」

「お喋りは駄目」

間合いを開け、呪を唱えた瞬間、四方八方から糸を飛ばされる。その糸をかわし避ける間に、間合を詰められた。

「身体で応えて」

絡新婦は無防備に俺の懐に飛び込み、俺の頬にキスをした。振り払うように放った俺の拳を軽く右手で掴み、ニコリと笑う。

「……マジかよ」

この俺が全くのガキ扱いだ。強いなんてもんじゃねぇ、次元が違う。

「とんでもねぇな、テメェ」

妖魔は翁によって、六段階のレベルに分けられている。

壱。人間以下、または同等程度の力を持つ妖魔。加えて人に危害を加えない者達が、此処にカテゴリーされる。危険性は極めて少ない。

弐。人間以上の力を持つ妖魔。力が弱くても人間を害する思考を持つ者は此処に入る。軽い監視を必要とするレベル。

参。銃や刃物等の一般的な武器が効かなくなってくるレベル。このぐらいになると人の精神に影響を与え始める。場合によっては駆除の対象だ。

肆。高度な徳を積んだ坊主さんや、実力や実績のある退魔師達が簡単に殺され始めるレベル。此処までくると土地神クラスなので、人間に危害を加えず、話しが通じるのならば交渉も有り得る。

伍。もはや厄災レベルの化け物。ただ存在するだけで周囲の物に悪影響を与え、人を壊す。九尾、酒呑童子、大天狗が有名な辺りだが、ここ何百年このクラスは現れていない。

零。判断つかぬ者。様々な理由で不明な点がある為、判断が付くまで様子を見る事が多い。

そのような感じで妖魔達は、翁によって発見、監視、記録をされている。その記録は俺も目を通していて、内容の全てを覚えているのだが、絡新婦については中国に巣を持つ【鴻嗤】のみが肆と認定されていて、それ以外の絡新婦に肆レベルの者はいない筈。だが、コイツは

「今まで何処に隠れてやがった、化け物」

コイツは肆だ。まだ力の殆どを見せていないようだが、それでも隠し切れない威圧がある

「またお喋り？　ならもう死ぬ？」

絡新婦は、ふわりと宙に浮く。月の明かりが、窓から僅かに入り、絡新婦の足元を微かに煌めかせた。

それは無色透明な糸。いつ張り巡らせたのか、絡新婦の巣は俺の周りを取り囲んでいる。

「もう少し愉しめると思ったけど」

絡新婦の腕が、硬質で鋭い肉鎌と化す。先からしたる黒い液は毒か。

「期待外れで悪いな。俺じゃアンタには勝てねーよ」

まともな手ではな

何気なく札を取り出し、それをライターの火で燃やす。

刹那、絡新婦の糸は俺を捕らえ、縛った。それだけで全身が軋み、ちぎれそうだ。

「つっぐ！　たく……普段から煙草吸っといて良かったぜ」

燃えて落ちる札は俺の内を照らし、深き闇からその姿を浮かばせる。それは俺を燃やし、己すらも焼く暴虐の炎。

暴れるな。今、お前の全てを解放してやる。

「きやれ、アヤカシよ」

今宵手を繋ぐのは

「アアギャアアアアアア！！」

「火車、狐火。……行くぜ、絡新婦」

後編

札を依り代に現れた金色の狐は、己が放つオレンジの炎に身を震わせ、猛る。

「ギギギエエー！！」

「っ！　テメェ！」

俺の意思を無視し、狐は暴れ馬のようにあちこちを跳ね回った。体育館中に張り巡っていた蛛糸は飴の様に溶け、その炎は先に立つ女にも向かって行く。

「これが切り札？　制御も出来ていないのに？　……うふ。いいの？　ここ燃えてしまうわよ」

女は自分に向かった炎を手で払い消し、ニヤニヤとおかしそうに尋ねた。しかし炎は止まらず、女を囲んだ。

「……狐火はねちっこくて嫌。この身体、余り焼かれたくないのよ」

うんざりと言う女に炎の絡み付き、その身体を飲み込んでいった。

「……ふざけるよ」

女に……ではなく、狐に呟く。

妖魔に魂を食わせるという事は、妖魔と魂で繋がるという事。後は意志の強弱だけが、力量関係を決める。早い話、俺は今この狐に力

負けしているのだ。

「……」

無言で燃える狐の首を掴み、そのまま床に叩き付ける。狐はキュルルルと短く鳴き、足をじたばたと暴れさせた。

「俺の邪魔をするなら、テメェは要らねぇ。ほっとくと人を襲う獣……消滅させてやるよ」

肌焼ける痛みと、焦げた肉が放つ不快な臭い。

ちっ、マジで割に合わねぇな。

「約束は約束だ。お前の母親は、必ず見付けだし成仏させてやる。安心して消えろ」

空間に指で呪文を刻み、呪の力を人差し指と中指に集中させる。そして狐の目に突き刺した。

ギっ！　ギィアアアあぁあぁぁぁいぃぃ……

耳をつく狐の断末魔。その声は掠れてゆき、狐が動かなくなるのと同時に消える。

「……馬鹿が」

「私を無視してお遊びだなんて随分な余裕ね」

女を包んでいた炎はいつしか消えていて、それどころか体育館中の

炎が弱り、燻っていた。

「怨餌の糸。耐火性に富んだすぐれもの」

透明だった糸は黒く染まり、それは一定の法則をもって俺の周囲を除く体育館全体に張り巡らせている。

途中、張り巡る糸に気付かなかった訳では無いが、この規模の巣を僅かな時間で構築した蜘蛛のこれは、もはや結界と言ってもいい場の力を持つ。

その巣に先程の同じ様に身体を預け、何がおかしいのか女はクスクスと笑った。

「怨餌の糸ねぇ……」

まだ僅かに燃えている炎に糸が触れた。糸は燃えず、逆に炎を喰い消す。

「へぇ。すげえな」

煙草を取り出し、まだ手の平で僅かに燃えている炎を使って火をつける。

「ふー」

苦い煙が俺の肺に満ち、それを静かに吐き出す。

「で、これからどうすんだ？　そろそろ死んどくか？」

「……うふ。うふふふ。うふふふふふふふ」

笑う女の口は次第に裂けてゆき、人ではなく蛛のそれへと変わっていく。女の目の周りにも、人の物ではない、煤で汚れた消防車みてーな汚ねぇ赤い目が八つ、皮膚を突き破って出て来る。

「面白い。面白いわ、あなた。その面白さに免じて無礼な態度と振る舞いを許してあげる」

「そりゃ、どうも。なら許してもらったついでに女の居場所を教えてくれよ」

「女？　……ああ、あの子ね。そこの体育倉庫で寝ているわよ」

「……そうか」

まだ生きているのか。なら……

「終わらせるか」

「うふ。その目。まだ何か面白い事をしてくれるのね？　良いわ、あなたの胸に飛び込んであげる」

「ああ」

煙草の先端を指で弾き、火花を散らす。それで火が消えた吸い殻を、無造作にポケットへ突っ込む

「良いぜ、こいよ」

言葉を発した瞬間、蛛は俺の元へすっ飛んで来た。言葉の比喩や冗談じゃねぇ、文字通り真っ直ぐ一直線に飛んで来た。

かわすとか防御とか、んな事を考える間もねぇ。辛うじて出来た反応は、首を捻った事だけ。だがその行為が俺の命を救った。

「ぐっ！　ぐあ！」

左肩に激痛が走る。いやいてぇっつーか熱い！！

ごり……ぐち

「あ……がぁああ！」

肩に噛み付いた蛛は、そのまま俺を喰らおうと、顎に力を込めた。

クソいてぇしあちぃし頭ん中が沸騰しちまいそうだし！　まったく、マジで！！

「割に合わねぇんだよ！！」

肩に噛み付く蛛の目玉に向け、指を突き出す。それを嫌がったのか蛛は俺の肩から離れ、後ろへ下がった。

「ぎっ！？　ぎ、がぁあああああ！！」

クチャ、クチャ。

蛛の口がいやらしくうごめき、赤く染まる。

「おいし」

にたり。俺の肉と血を喰らい、笑う蛛。今、俺の肩がどうなってんか見たくねぇな。

「……うまいか？　じゃあ、死ね」

「え？　ぶふっ！」

痛みでクラクラする頭を無視し、指で印を作る。そして体内で蓄積させておいた気と妖力を同時に発し、奪われた俺の血肉を燃やす。

「い……イギィイイイイ！」

何が起きたのか分からずに、驚いた表情を見せた蛛の顔は次第に苦痛に満ちたツラとなり、声にならない叫び声を上げた。

「憑依狐火。内から燃えて死ね」

蛛は胃袋から焼かれると言う想像を絶する痛みに耐えかねたのか、膝を崩し倒れた。その糸も弱々しく弛み、消えてゆく。

「……ふぅ」

蛛が完全に動かなくなったのを見遣り、俺は狐の横へしゃがむ。ズキズキと動く度に痛む肩やこめかみが、ウザったい。

「……悪かったな」

強引にお前の妖気を俺に憑依させた。

「だが、おかげで助かった。ありがとよ」

狐の額に触れ、その気を返してゆく。先程までぴくりとも動かず横たわっていた狐の瞼がゆれ、鼓動も強くなる。

「それじゃ、またな」

最後に狐を俺の内なる世界へと戻し、俺は体育館倉庫へ足を進めた。

四、髪鬼　前編

倉庫の扉に手を振れ、開くと中は一面糸が張り巡らせてあった。その糸はマットの上で倒れている富里の周りを囲む様に張っており、特にその髪へ幾十も巻き付いている。

「……」

俺にはヨーカイレーダてなもんや、鋭い勘ってものは無い。だが、明らかに異様もんを異様と感じられない程、鈍感な訳でも無い。

この糸は女一人を捕らえる為、と言うより何かを封印する為の縛り。つー事は。

「何かに憑り付かれてるのか？」

「あたり」

「っ！？」

耳元へ甘く囁かれた女の声に、俺は肘を飛ばす。しかし手応えは無く、勢いのまま振り向いた時には、声の主は視界から消えていた。

「けほ。ちょっと胃もたれ」

「テメェ」

富里の隣に腰を下ろし、暑そうに手で扇ぐ女、絡新婦。全くの無傷に見える。

「ふふ、さっきのはちょっと良かったわ。お肉も頂けたし」
舌で軽く唇を舐め、蛛は笑う。富里の直ぐ横に居る今、攻撃を仕掛ける事は難しい。
「……もっと遊んでやるよ。此処を出ろ」
「もう良いわ。これ以上興奮しちゃってたら、貴方を殺してしまうもの」
反論するのも馬鹿らしい事実。先程の攻撃で倒せなかったのだ、今の俺ではあっさり殺されるだろう。
「……俺の負けか」
構えを解き、両手を軽く上げて開く。お手上げって奴だ。
「で、何でソイツをさらったんだ、お前は」
昨日食った飯を聞くかのように、軽く尋ねる。
流れが悪い、主導権を握られ過ぎている。此処から逆転は難しいが、最悪相打ちまでには持っていけるだろう。……つかマジで最悪だな。
「さらう？」
俺の言葉に蛛はキョトンとし、次に微笑む。
「人間なんかさらわないわ。本来ならこんな汚いもの、触りたくも

無いのに」

蛛は侮蔑を含んだ目で富里を見下ろし、次に子供が珍しい玩具を見た時の様な、好奇心に満ちた目で俺を見つめた。

「私は綺麗な物が好き。服も装飾も食べ物も。だから汚い人間なんていらないの。でも貴方は……うふ。珍しい物も好き」

「悪いな。俺は年増に興味ねーから」

「あら、残念。振られてしまったみたい」

蛛は余裕ありげにクスクスと笑っているが、隙らしきものが一切無い。ただ、どういうつもりか知らないが、戦うつもりも無いようだ。

「この子、妖魔に食べられそうだったから約束通り保護してあげたの。ただ余り美味しくなさそうだし、いらないから置いていこうと思ったのだけど……、お陰で素敵な出会いがあったわ」

「助けた？　約束？」

「今日は存外楽しめた。ありがとう」

そう言い終わるのと同時に、蛛の体は砂の様に崩れた。それは数万匹はいるだろう小さな蜘蛛の集団。

「さようなら綺麗な退魔師さん。またお会いしましょう」

声は遠くなり、大量の蜘蛛と共に消えた。

「……」

俺はほぼ無意識に上着の懐に手を入れ、タバコの箱を探す。だが、指はお目当ての物を見付ける事が出来ず、未練たらしく宙をさ迷う。

「……ち」

体育場に落としたか。

諦め、富里に近寄ろうとした時、離れた場所から近付いてくるサイレンの音が聞こえた。

俺は溜息一つを漏らし、糸でがんじがらめになっている富里を痛まない方の肩で背負い、陰陽道、禹歩のステップを踏む。

この特殊な歩行術は、俺への厄災を避ける。俺は誰にも見付からぬまま、体育館や人が集まって来ていた学校を出て、自分の家へと向かい走った。

後編

『お父さんの様に強くなる！』

ああ、そうだ、それが俺の目標だった。

あんたは俺にとって誰よりも強く、優しく、でかい背中を持った存在だったんだ。その背中を見ながら育った俺は、あんたの様に強くなりたいと本気で願っていた。

『強くなりたいのか宗一郎。なら、沢山人を愛せよ。俺はこんな商売だ、人間の汚い所ばっかり見てきた。だけどお前を愛する事で俺は俺でいられる。強くいられるんだ』

『そうなの？　お父さん』

『ああ。お前が居れば、俺は誰にも負けない。お前の父さんは無敵だ！』

『うん！　父さんは無敵だ～』

『あっはっはっは！』

「……ふん」

嘘つき野郎が。

「う……ううん」

俺の家に富里を連れ込んでから二時間の時が経っていた。まるで死んでいるかの様に眠っていた富里だったが、蜘蛛の糸から解放したからか、徐々に覚醒し始めている。

「……起きたか？」

微かに震える瞼に声を掛けると、富里の目はうっすら開いてゆく。

「ん……ん！？」

うつらうつらしていた富里は急に目を見開き、飛び起きる。

「八坂君！？」

「ああ」

「え？　な、なんで八坂君が私の家に……あ、あれ？　こ、此処、私の部屋じゃ……っ！？　な、何で八坂君裸なの！？」

「あ？　ああ、これは」

「……て言うか八坂君、身体綺麗過ぎ。なんだか自信無くす……って、そうじゃないよ！　そんな事よりなんで包帯！？」

パニックになっているのか、富里はアタフタしながら要領無い事を聞く。

「……めんどくせぇから一気に説明するぞ」

「う、うん！」

「この何も無い殺風景な部屋は俺の部屋だ。時間は深夜十時前、上を着てないのは怪我を治療していたからだ。で、お前は今、妖魔に憑かれいる。憑いてるもんは、髪鬼って奴で髪の毛に擬態し、人間に寄生して気を吸う雑魚だ。お前が寝ている間に終わらせようとしたんだが、髪鬼は蜘蛛の糸によって力を吸われたらしく、休眠状態になってた。それでお前の髪と髪鬼の区別がつかない状況になり、めんどくせーからお前を丸坊主にしてまとめて消滅させようと思った訳だ。だけど最近寒いだろ？　髪ねーと尚更寒いよな。つーことで、仕方ねーからお前と髪鬼が起きるのを待ってた訳だ」

「……」

説明を聞き終えた冨里は全く理解していないのだろうボケーっとした顔で俺を見つめている。

「理解しなくて良い、どうせ直ぐに忘れるしな。それより……」

「？　……ひっ！？」

冨里の髪の一部がミミズうごめき、逆立った。どうやらお目覚めらしい。

「ふ～。じゃ、さっさとやるか」

早く眠りたいしな。

「え？　な、何？　何、何するの！？」

「目を閉じてろ、直ぐに終わる」

「え？　そ、それってまさか天井の染みを数えてれば直ぐって奴じゃ……」

「染みなんかねーだろ、つかやるぞ。オンキリキリ」

九字を刻み、内縛印を結び不動明王の中呪を唱える。

「ナウマクサマンダバサラダンセンダ――」

「や、八坂……君？」

戸惑う冨里を無視し、続けて読み上げる。これは魔物調伏の咒。髪鬼の様に余り動かない妖魔にはこれで十分だ。

「――ウンタラタカンマン……不動金縛りの法。落ちよ」

「へ？」

間抜け面している冨里の頭から、逆立っている髪がホロリと抜け落ちた。それは一本から二本、二本から四本と抜ける数を増やしてゆく。

「え？　え？」

「……ま、気にするな」

ドサドサ。音を立て一気に落ちる髪。冨里は自分の身に何が起きているのか良く分かって無いらしく、唖然と落ちた髪を一束拾う。

「……こ、これって」

震える声と手で、冨里は自分の頭を触る。だが、特に変わった様子が無い頭部に、冨里は安堵の息を吐く。

「あ、ある。よ、良かった……よ、良く無いよ！　なんなのこれ！？」

「忘れろ」

「忘れろって！」

「おやすみ冨里」

「おやすみ……って……ふに」

「ふ、単純だな」

言魂だけで寝てくれた。

「さて……行くか」

コイツの親も単純なら良いが。

冨里の髪を抜き、簡易な人型を作る。

「……はぁ」

溜息をつきながら冨里を抱き抱え、コイツんちが近い事を祈りつつ、

俺は渋々玄関へと向かった。

髪鬼　了

五、師父　前編

死んでも良いと思った
死んだら良いと思った
だから死んでも驚かない
きっと死んでも驚かない
肉が腐って、虫が湧いて骨が酸化して
だけど死なない
死ぬまで死なない
だから死ね
きっと死ね
死ね
死ね
死ね
死ね
※

退魔師はこだわりを持つ者が多い。覚える術、使う道具、そして所属する組織。

こだわりを持つ事自体は悪くない。己の可能性を狭める事もあるが、そもそも人間に無限の可能性など無いし、広げなくても今ある自分を極めてゆけば良い。

こだわり。もし俺に何かこだわりがあるのだとしたら、何もこだわりを持たない事、それがそうなのだろうと思う。

S県××村。その村の裏から行ける山の樹海に、俺の目的地がある。それは疫彦と呼ばれる男の庵だ。

朝から電車とバスを乗り継いで、ようやく村に入った頃には日は落ち、辺りはすっかり暗くなっていた。それでも時間が惜しく樹海に入ってはみたが、お陰様で現在絶賛遭難中となっている。

「……ち、あのジジィ」

森に展開している結界の構成を根本から書き換えてやがる。お陰で去年まで使えた標の術は使えないし、気脈がぐちゃぐちゃなので方向すら定まらない。

あのジジイの事だ、朝には歩けば自然と森の外へ出られる様にしているんだろうが、俺が目指しているのは奥深く。面倒臭いが早いとこ結界の種類と綻びを見付け、先に進くか。

「……比、不、深、壹、噎、無、」

眼を閉じ、耳を塞ぎ鼻を潰す。感覚、触覚を無くし、心を閉ざす。
我は無。無、故に無限。無限なれば空間の何処にでも我は在る。
広がる様に、潜る様に。流れる。ただ流れる。
閉じられた空間。微かに外へと流れる場所。
「……そこか」
結界は隠業、菱形の計。綻びは結界と森を結ぶ交点。
俺はズボンのポケットに手を突っ込み、二枚の札と古びた木製の八卦を取り出す。
「開け」
綻びのある場所を挟む様に生える二本の木、それぞれに札を張りつけ門を作る。それを潜り、八卦を行う。
「……北々西か」
たく、面倒な事をさせやがって。
八卦に導かれた方向へ十分程歩くと、竹で出来た小屋を見付ける。
これが疫彦が住む庵だ。
「俺が森に入った事は知ってたんだろ？」
庵に話し掛ける。返事は直ぐにあった。

「早かったやないか。わしの結界を一時間掛からんと看破するやつは、お前ぐらいや」

髪が殆ど抜け落ちた頭をかきながら、骨と皮しかねージジイが小屋から出て来る。ジジイは天狗並に長い鼻をひくつかせ、俺の持つコンビニ袋に涸れた眼を向けた。

「酒とイカか。分かってるやないか、流石わしの一番弟子や」

「死んでりゃ供えてやろうと思ってな」

「アホ抜かせ。酒は生きて呑むからこその酒や。御神酒や言うて供えたって呑めんもん神さんも喜ばんわ。ほれ、はよう入れや。酒が呑め呑め呼んどる」

「分かった、分かった」

全くうるせー爺さんだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6396t/

あやかし退魔録

2011年11月29日02時00分発行